
イナズマイレブンGO 親友でシード

牛先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブンGO 親友でシード

【Nコード】

N0723BA

【作者名】

牛先輩

【あらすじ】

剣城京介がシードとして雷門にくる一年前すでにシードはいた。

そのシードは神童拓人、霧野蘭丸の親友である。

親友と仲間のため一人のシードがサッカー部を守り続け、やがて革命を起こすサッカー部と管理サッカー・・・どちらの味方になるのか。

タイトルは決定してないのでいいのが浮かんだら教えてください。

第1話 これが雷門（前書き）

正月になっ たら突然書きたくなっ たんだ！

その衝動を抑えられず書いてしまいました！

皆さん温かい目で見守ってください

第1話 これが雷門

『ここが雷門中・・・』

中々でつかい学校だな・・・

僕の名前は千歳来春ちとせらいはる

今日から雷門中に入学する12歳だ

小学校では・・・アレだったけど・・・ま、色々頑張ろう

まあその色々に結構重要なものがあるけどさ

この雷門はサッカーでは名門中名門！そして雷門中で有名なのが

サッカー棟という建物だ

確かサッカー部のために作られた部室

中には屋内グラウンドにシャワールームにミーティングルーム・・・
どんだけ・・・

さてじゃあそのサッカー棟とやらに行き 「お前新生か？」

『うおっわっ！！！』

なんだ！？なんだ！？一人でたらだらモノログしてたら！？

「あーあ三国何新生びびらせてんだよ」

「そっただド！」

「まっただ」

紫の髪のアナルシストっぽい男と横の巨漢な男と鼻に絆創膏つけた男

に言われ角刈りの男は慌てて

「ち、ちよつと待て！南沢、天城、車田！？俺は話しかけただけだぞ！」

「それはともかく助けてやれよ、そいつ腰抜かしてるぞ」

『あ、だ、だ、だ、大丈夫です』

た、立てない……

「そうかやはり新入生か」

『はい』

「さつきはすまなかつたな驚かせて」

『いえいえ！勝手に驚いただけですし』

「それでも悪かったな、俺は三国太一だよろしくな」

『千歳来春です。よろしくお願いします』

「俺は車田剛一だ」

「天城大地だド」

『そちらの方は……？』

「南沢篤志……」

『よろしくお願いします』

「全員二年のサッカー部だ」

サッカー部……じゃあ……

『サッカー部ですか！？僕サッカー部に入りたいです……！』

「そ、そうか……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「」

先輩方の顔が暗くなる・・・まあサッカー部だしな
そんな事思っていると三国先輩が案内すると言ってくれた

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

うーん暗い・・・
ここはなんか質問でも

『皆さんのポジションはどこなんですか？』

「ん、ああ俺はGKだ」

「俺はDFだ」

「以下同文だド」

「・・・フォワ」 『FWですね』 なぜ知ってる

『いやなんとなくですが』

まあ知ってたけどさ・・・

さーでどうするべきかな？わかりやすくするか、裏でやるか・・・
ま、自分にあってるほうでやるかな

『絶対にこの秘密はばらせないな』

「「「「「秘密？」「」

『えっ！？なんで僕の心の声が！？』

「いや声に出てたぞ」

「だっ」

『あのちなみにどこら辺から』

「絶対にこの秘密はばらせないな からだ」

まあそこまでなら別にいいか・・・

「なあ秘密ってなんだよ？」

「車田やめろ」

「そろそろ着くド」

「フン・・・」

そしてサッカー部部室改めサッカー棟に到着

第1話 これが雷門（後書き）

くそっ！天城は簡単でも南沢が！
あとキャラの特徴がつかめない！

感想などお待ちしてます！

主人公紹介（前書き）

オリキャラは登場したら紹介していきます

主人公紹介

名前 千歳来春ちうせらいは

ポジション F W

性別 男？

一人称 僕

特徴 銀髪で艶のある髪。髪の長さは普通。前髪がカールしている。顔も結構普通だが少し女子っぽい。

性格 明るく活発でクラスや部の中心。知り合いは下の名前で呼んだりあだ名をつけたりする。しっかりしてるようで抜けてるところがある。やや天然。背が低いのを気にしてる

年齢 13

身長 149センチ

その他の設定 神童と霧野の親友。他人によく好かれて嫌われる事はない。

サッカーの实力は高く入部してすぐ神童、霧野と共にファーストチームに入る。

部で一番フィフスセクターを恐れているが理由は不明。そのためフィフスセクターに逆らうものは全力で止める。

必殺技

シュート技 「ザ・ソード」 フィディオのオーディンソードを参考に作った技

OF&DF技 「山崩し」 巨大な山を作りキックで山を崩して崖崩れを起こす

第2話 神童、霧野との出会い（前書き）

書き始めは結構書けるな！

第2話 神童、霧野との出会い

『で、でっかいですね・・・』

「まあそう思うよな？」

「俺たちも同じリアクションしたからな」

「車田はすごい叫んでたド」

「う、うるせーな！」

『中はどんな感じなんですか？』

少し楽しみだなこんだけでかいと・・・

早く中を見た

「三国！」なんだ？

「先輩・・・」

先輩？よーするに三年か・・・

「ミーティングの時間だぞ早くしろ」

「はいしません」

「じゃあ先行くからな」

「はい」

三年の先輩はサッカー棟の中へ戻っていく

「すまないな千歳俺たちもう行かないと」

『いえ！また後で来るので』

「やめとけよ」

『！・・・南沢先輩？』

「・・・行くぞ」

「」「ああ」「」

その時の南沢先輩の顔は三国先輩達もだが何かすつきりしない何かを感じさせた

『・・・まあ当然か』

その時の僕の声は普段からは想像できないほど深く暗かった

入学式が終わった・・・というか飛ばした・・・だって長いしつまらないし

そして自分のクラスへと向かう・・・

1-C・・・ここか

とりあえず僕は教室のドアを開け中に入るとドアの前にいた男にぶつかりそうになる

『うわっ！とと』

「！！！」

その男は普通に横に避け

僕は右半身を倒し右足でバランスをとりながら避ける

ふうーあぶないあぶない

とりあえず声をかけ「大丈夫か？」ありや先に声かけられた

『あ、うん大丈夫そっちは？』

「ああ大丈夫だ」

・・・その男の見た目は灰色でウェーブしてる髪に整った容姿をしていた

ワカメみたいと思った僕は駄目なんだろうか・・・

「神童!？」

「霧野か・・・」

霧野と呼ばれた女子が窓の方からやってくる

・・・学ラン着てる？趣味男装？でも声低め・・・

「どうしたんだ？」

「いやドアを開けたらぶつかりそうになってな」

「そうか・・・君は？」

『千歳来春おなじクラスみたいだね、よろしく』

「俺、霧野蘭丸」

「俺は、神童拓人」

『拓人くんは蘭丸ちゃ　「言つとくが俺は男だぞ」え!?!嘘!?!』

確認の視線を拓人に向ける

拓人は慣れた様子で顔を縦に振る

『ええーーーーー!!!!!!?』

嘘！！こんなそこら辺の女子より女子っぽいのに！！！！？

「気持ちはわからなくもない」

「ハア・・・中学でも間違われるとは」

『・・・女の子に間違われるの嫌なの？』

「そりゃそうだよ」

『ま、まあ気持ちはわかるよ』

前に僕は男なのか女なのか口論になったほど僕も中性的だ

『ま、まあ蘭丸に悪いし・・・この話はこのくらいにして・・・二人は部活とか入るの？』

「俺はサッカー部に入るつもりだ」

「俺もだ」

クールな拓人の声が少し明るくなる

蘭丸も女の子っぽい顔が普通の男の子みたいな笑顔になる

「千歳は？」

『僕もサッカー部！いやー運がいいな』

「なにがだ？」

『だって中学になってできた初めての友達と部活が同じなんだからさー！』

「ああそうだな！」

「そういう意味じゃ俺達も運がいいな」

『ハハッ』

キンコンカンコン

「はい皆適当に席についてくれ」

『拓人！蘭丸！近くの席にしよう！』

「勿論」

「じゃ、早く座ろうぜ席埋まるからな」

そして放課後

第3話 放課後（前書き）

ちよつとサブタイトルに苦戦した

第3話 放課後

「サッカー棟・・・思ってた以上に・・・」
「でかいな」

『僕もビックリしたよ』
「とりあえず中に入ってみるか」

入り口から入り中を覗くとまた広いが・・・

「中に入るとまた圧倒されるな」
『中学生の部室ってレベルじゃないよね』

「あ、あの・・・」

後ろから声が聞こえるので振り向く

そこには三人いて一人は気弱そうな大きい眼鏡

もう一人は浅黒い肌で左目が髪で見えない小柄な男と

最後に同じく褐色肌のゴーグルをおでこに付けた少し軽そうな男の
三人組・・・

「何か用か？」

拓人が一歩その三人組に近付き話しかける

「え、えーと」

「どうした？速水早く聞けって」

「なんだあ？お前人見知りかあ？」

「だったら倉間君や浜野君が聞いてくださいよ」

速水と呼ばれた気弱そうな眼鏡はため息をついて再度こちらを向く

「えーと・・・ここがサッカー部の部室なのはわかったんですが入部届けはサッカー部のどこに提出するんですか？」

『わかんない！！』

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

あれ？なんか皆静かになっちゃったよ？僕は事実を言ったまで・・・

「お、俺達もサッカー部に入るし一緒に探そうぜ・・・」

蘭丸が沈黙を破り、三人加わりサッカー棟の中を歩く

歩きながら三人に話しかけてみた

『そついえば三人とも名前は？』

「速水鶴正です」

「倉間典人」

「浜野海士！よろしくー」

「俺は神童拓人」

「霧野蘭丸」

『僕が　「千歳来春だ」ちよっ！拓人！』

「お！なんかあそこっぽくね！」

海士が指差した方向には少し大きめの扉があった

「よーしいこう！」

「浜野君！待ってくださいよ！」

そう言うと海士が扉に進んでいくそれを鶴正が追いかける

『鶴正足速いなあー』

「ああ、あれは武器になるな」

「とにかく俺達もいこうぜ」

扉を開け中を見ると

『ここは屋内グラウンドか・・・すごいな観客席まで・・・』

「あつ！皆！人がいるぞ」

『拓人よく気づいたね』

こんな広いグラウンドを見てすぐ人を探すつて余裕あるな！
ん？あれは・・・

『三国先輩！』

「！ああ千歳か」

「こいつらは？」

『南沢先輩、全員入部希望者です』

「そうか今年が多いな」

『入部届けはどこに置けば・・・？』
「ん」

南沢先輩が親指で他の部員の人達の方を指差す

「あそこの顧問に渡せ」

よく見ると部員たちのところに先生と思われる人がいた

（第二グラウンド）

「ではこれより入部テストを始める私が監督の久遠道也だ」

「私は顧問の音無春奈」

「ルールは普通の紅白戦だ

点を入れられても点をとれなくても構わない動きを見せてほしい
部員から点をとった場合でも一年からのキックオフとする」

「なお入部希望者は30人ほどいるため5分ごとに交代していきま
す」

「以上だ。それでは試合を開始する」

第3話 放課後（後書き）

感想お待ちしてまーす

第4話 入部テスト（前書き）

今回は結構懲りました

第4話 入部テスト

『さてポジションはどうする?』

「俺はMFをやらせてもらう」

「俺も」

「お、俺も」

「俺も 『もういい!』 なぜ?」

『把握しきれないから』

「確かに、よし!俺に任せてくれ!俺がフォーメーションや指揮をとる!」

「神童……」

拓人……?なんか便りになるな

『よし!任せた!皆文句ない!?』

「勿論」

「OK!」

「俺もいいですけど……」

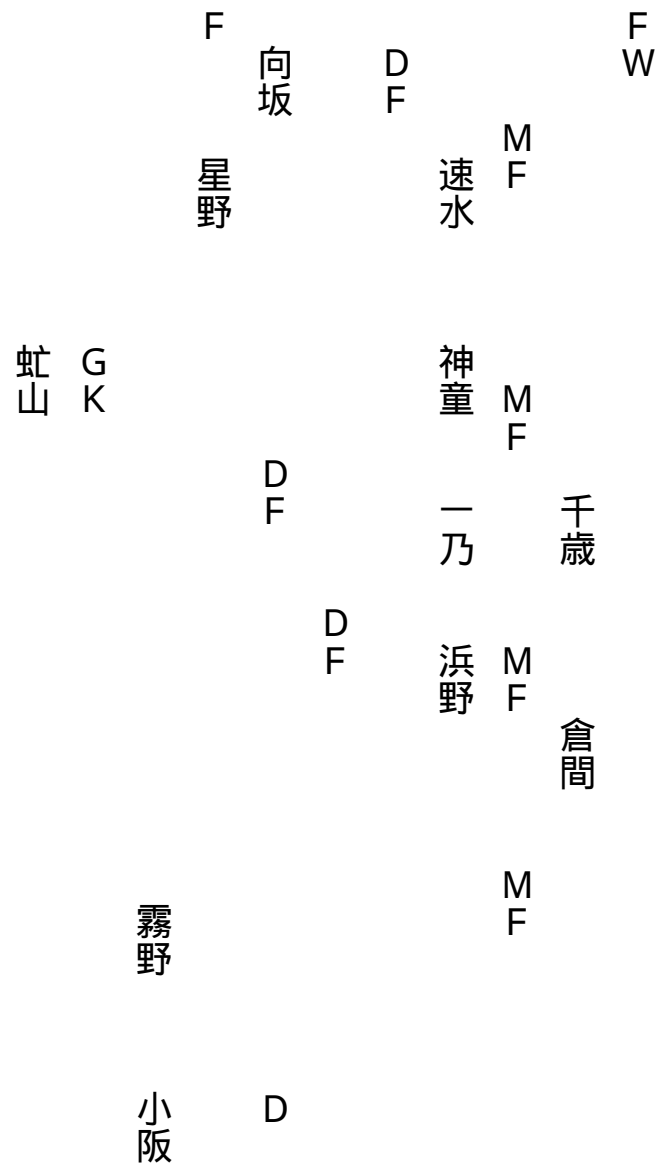
『よし!』

「お前達そろそろ始める、準備を済ませろ」

『「はい!」「」「」「」』

フォーメーション

FW



「先攻は一年からだはそれでは試合開始！」

その言葉と共にホイッスルの音が鳴り響く

「行くぞ」

『オツケ』

倉間からのキックオフで来春にボールを転がす
それに合わせFW&MFが上がり始める

パスしていき来春から神童に神童から倉間に回る

「よし！このまま！」

「雷門を甘く見ない方がいいぜ」

前から走ってきた南沢にすれ違い様にボールを奪われる

「何っ！」

「甘く見るなと言ったろう?」

走りながら余裕の表情を南沢は見せる

「轟先輩!」

南沢からのパスを受け轟と呼ばれた男はフィールドを翔る

「行くぞ!」

轟はそのまま走るがあえて一乃の方向に向かい走る
あくまでこれはテストなのだ力量を計るためのものだ

「さあ!止めてみる!」

「くっ!うおー!」

一乃は大声をあげながら轟に突っ込む

しかし巧みなフェイントで轟はあっさりかわす

「キーパーの実力も見たいし・・・南沢!」

轟と南沢は並行して走る。

当然ディフェンスも止めに来るがあっさりかわす

そして残るはキーパーの虻山と霧野だけだ

「させない!」

そう言い霧野はボールを持つ轟に向かう

しかし轟と南沢はアイコンタクトで合図をとりながらワンツーで抜

き去る

「点を取るぞ！南沢！」

「はい！」

そう確認を取ると轟は南沢にボールを渡す

そして南沢は必殺技の態勢に入る

「ソニックショット！！！」

南沢は右足を振り上げ力を溜めボールにその力を正確に込め放つ

「止める！虹山！」

「うわあー！！！」

南沢の必殺技はキーパーの虹山を吹き飛ばしゴールに突き刺さる

ゴールが揺れる音と共にホイッスルが鳴る

「くそっ！」

「あんなの止められないよ」

「レベルが違いすぎる」

「皆……」

倉間が悔しがり一乃と霧野が自信を失い神童はそれを見て焦る
そこに来春が声をかける

『そうかな？』

「」「」「」「！！！！！！？？？」「」「」「」

『・・・監督時間をください』
「わかった10分だ」

なぜ簡単に時間をくれたのか一年は疑問に思うがすぐさま来春の言葉に頭が行く

「どういうことだ！千歳」

『来春でいいよ、確かに先輩方の動きは速くて軽やかで巧みで鮮やかで強くなにより経験が詰まってる』

「じゃあどうしろってんだよ!？」

「ちゅーかそれじゃあ勝てねーじゃん」

「無理だったんですよ」

倉間が吠え浜野と速水が半ば諦める

『別に試合に勝てとは言われてないんだ。皆が入部できるように実力を見せればいいんだ』

「そんなことわかりきってる！それができないから」できないと決めつけてどうするのさ『!?!?』

『確かに時には諦めてしまう時もあるさ。「諦めるな」なんて言わない。でも」できる「時に諦めるのは諦めること以上に駄目だと思っ』

倉間をはじめとした一年の面々は言葉を失う

「千歳・・・いや来春策はあるのか?」

『なくはない』

「そんなちっぽけな希望で行けるわけが

」

『希望は希望だろ?』

「くっ」

『さて試合が再開させよう先輩方が待つてる』

そついいながら来春は自分のポジションに戻る、その時神童とすれ違う様にこう告げる

『この試合の鍵は拓人だ』

「.....」

チームがまとまらないまま無情にもホイッスルの音が響く

「.....」

倉間はボールを来春に渡さず後ろの神童に渡す
それにあわせ攻撃陣が上がる

「倉間！なぜ来春にボールを渡さない!？」

「あんなやつに任せられるか!」

『信用ないな』

神童はボールを一乃に渡し一乃は浜野にボールを渡す

浜野はボールをキープし続ける

そこに現雷門のMFが止めに入る

「げっ！まずっ！」

「こっちだ！」

神童は無意識に右手を大きく振るう。

その時その場にいた者は神童の振るう手から放たれる光の道を見た
浜野はそれに従うようにボールを蹴る

ボールは神童の導くままに来春に渡る

『ナイス！拓人！海士！』

「おい！なにあいつにボール回してんだ！！」

「いやなんか自然に・・・」

倉間は浜野に吠え続け足が止まる

その時ボールはまだ来春がキープしていた

「行かせないド！」

ここでDFの天城が止めに入る・・・が来春はジャンプし空中で回
転して弧を描く

「なんだド！？」

『甘いですよ！』

残るはキーパーの三国のみ

『決める！』

来春の右足がボールと共に光輝きボールを蹴れば

光はより一層強く美しく輝きその光は巨大な剣となりゴールに向か

う。

その剣の名も

『ザ・ソード！！！！』

「『三國！』」

2年にしてゴール守る三國それはつまり3年の先輩をさしおいてと
いうことだ。

だからこそ新入生に点を入れられるわけにはいかない。

そんな気持ちを胸に三國は腕に炎を纏い空中で回転し炎を纏った拳
でボールを叩きつける

「バーニングキャッチ！！」

・・・がザ・ソードの威力を殺しきれずゴールを許してしまう
これで1-1である

部員達はおるか入部希望者達も絶句した

それもそうだ同じ一年が2年のDFを抜き必殺技でゴールを決めた
のだから

数秒間沈黙とホイッスルの音だけしかしておらずその数秒後沈黙は
喜びの声に変わり

フィールドの一年が戻る来春に駆け寄る、一名除いて

「すごいですよ！」

「ちゅーか！ゴールしちゃったよ！しかも俺アシスト！」

「やるな！来春！」

『拓人こそ！！』

「お前必殺技使えたんだな」

『いやいや蘭丸だって練習すればできるよ!』

来春のゴールを称える中フィールドの外の久遠が声をかける

「千歳は交代だ、錦入れ」

「わかったぜよ!」

『はい』

その後の試合は神童の描く光の道が出ることはなかったが

一年も粘り同じ一年の錦龍馬のシュートで2 - 1になり逆転する。

その後は雷門イレブンも本気になり2 - 2となり試合はそのまま終わる

一年は何回も試合に出たり下がったりだが来春だけは試合に戻ることはなかった

入部テストが終わり皆帰路に着く

その時来春が神童と霧野と一緒に帰りたいたいと言い出し3人で帰るところだ

入部テストの結果は後日聞かされるらしい

三人肩を並べて夕日を背に話す

「やったな」

「まあまだ合格が決まったわけじゃないがな」

『いやいやあの名門の雷門に引き分けだよ!充分だって!』

「それもそうだな」

「それにしても・・・」

『どしたの？蘭丸？』

「来春だけなんで試合に戻らなかったんだ？」

僕は今更疑問に思い原因を頭の中で検索する

『「ザ・ソード」でゴール決めてから・・・だね』

「・・・霧野、来春」

『「何？」』

考え込んでいると拓人が話しかける
すぐ僕と蘭丸は返事をする

「家に寄ってかないか？」

『はい？』

「俺はいいけど・・・よく行くし」

『な、なんで？』

「歩きながらより家の方が話しやすいと思って・・・あと・・・」

「ああ」

拓人が言葉に詰まると蘭丸が納得した表情になる

『え？なに！？なに！？』

「（振り向くなよ・・・後ろに人がいるんだが）」

「（神童のファンクラブだよ）」

『（ファンクラブ！？）』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ、そのファンの人たちが話しかけてこないか不安とかそんな
か！仕方ないな

『わかったよ行く』

「助かる！何か飲みたい物はあるか？」

「俺適当にあるものでいいけど」

「来春は？」

『コーラいちごミルク味で！』

「マニアックだな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723ba/>

イナズマイレブンGO 親友でシード

2012年1月2日09時45分発行